

C A S T

・声

・女

・男1

・男2

*

*

*

冬の昼下がりに。

マンションのリビング。

テーブル、椅子がひとつ倒れている。

他には何も無い・・・ただ朝顔のツルが部屋に密生している。

やがて女性の声が聞こえてくる。

声

お分かりいただけるとは思っておりません。

なぜならアナタと私は違うワケだし結局私の話を聞いて、或いは話をしている私の表情や様子を手掛かりに起こったコトを想像するしかないのですから・・・なのに私はボンヤリと霧の中に突っ立ったまま方向すらままならない様な感じで、まるでさっき見たハズの夢を思い出す時の様な、苛立ちと諦めの混じった・・・今の私はそんな有り様なのです。

鮮明に覚えている場面も確かにあることはあるのですが、それも夢と同様に順序がバラバラで繋ぎ合わせようとするとどこかで矛盾が出てきてしまいそうで、躊躇をすると今度はその鮮明なハズの場面もするりと逃げてしまうのです。

問。

今、「場面」という言葉を使ってしまっただけで少し後悔しています。

もちろん映画やドラマのワンシーンみたいにあの出来事を認識しているワケではありませんし、あの時の焦げた様な匂いは今でも私の手の平にこびり付いて消えてはくれません・・・今もしつかり・・・この匂いは一体何なのでしょう・・・線香花火の残りカスの様な匂い、マッチを燃やした後の匂い、リンが燃える時の匂い、そう言えば人魂もリンが燃えて現れるモノだと聞いたことがあります。

これが人間が死ぬ瞬間の匂いなのでしょうか？だとすれば私の手の平には瞬間がこびり付いていることになりませんか・・・死の瞬間が、ずっと。

問。

とにかくそれは私の中だけに存在した恐怖なので……今、「恐怖」という言葉を使った途端にあれば本当に「恐怖」だったのか自問をしてしまいます……「恐怖」と言ってしまうとただ恐ろしいとか怖いとか……恐ろしかったのは確かなのですが私の中にはその「恐怖」を胸の奥のどこかでチクリと期待している様なところがあった気がしてならなくて、それを「恐怖」という二文字の中に押し込めてしまうのは違う気もするのです。

言葉で伝えるというのは本当に難しい……言葉を仕事にしていたのに今更ながら恥ずかしい思いがします。

女が部屋に入って来る。

……。

女

女、部屋の様子を眺める。

声

大学を出てすぐに地元出版社に勤めました。

氷河期と言われた頃で四大出の女子には就職もままならず、こんなことになるなら親の言うことを聞いて教職課程を受けていれば良かったとか、公務員試験の勉強をちゃんとやっていたれば良かったとか、焦ると言うよりも途方に暮れていた私でしたからその出版社から声を掛けて貰った時は本当に嬉しかったのを覚えています。そこは二年生の時に半年程アルバイトでお世話になっていた小さい出版社でした。一年経ったら社員にしてくれるという口約束でまたアルバイトとして雇われたのですがその時の私にはそれでも十分だったのです。

女、カバンからタブレットを出して部屋の様子を撮影。

最初の仕事は内容の殆どがグルメ紹介といった情報雑誌で、担当していたKさんの助手としてカメラマンと三人で市内の飲食店をアコチ駆けまわり、私はその店のあまり美味しくもない自慢の一品に五十文字程度のコメントを添えるのです。

「まるで高級レストランの味 夏にピッタリ ナスとトマトをふんだんに使った 冷たいパスタがなんとワンコインでサラダ付き」

「とろける様なジュシーな味 どんなに食べても胃にもたれない 自慢は醤油ベースの秘伝のタレ 焼き肉ならズバリここで決まり」

「店長の自慢はじっくり煮込んだチキン ランチタイムではナンのおかわり自由 パキスタンからやって来た本格カレーの専門店」

女

…… 駅から歩いて十五分 公園の近くで安らぐ空間 駐輪場も完備 格安物件

女、コメントに写真を添付して送る。

声

雑誌は隔週でしたが、一度に二十店舗も紹介しますから似た様なコメントばかりになってしまうのです。

Kさんからは「言葉なんかは使い回し、考えちゃダメ」と助言を頂いたのですが、私にはどうしてもそれが出来ずに思い悩むばかりでます。言葉が出て来ません。子供の頃から頑張り過ぎてしまうと言うか、中途半端なことが許せない所があります。そして、それで今でも追い詰められた気分になってしまうことが度々あります。

飲食店を取材しているのにもかかわらず食事も喉を通らなくなってしまい、随分と痩せてしまっていて、グルメ情報の担当がそんな見た目ではダメだと怒られて半年でクビになってしまいました。

それから就職情報誌が愛読書、片っ端から面接で落とされ続け・・・そんな私を拾って下さったのは家電商品を販売する会社でした。

もう失敗は許されないという悲壮感で一杯でしたが、この会社は私に大きな転機をもたらしたのです。

なぜならそこで出会ったのがあの男だったのですから。

女の携帯電話が鳴る。

女

・・・もしもし・・・見ました？・・・横山君からも報告受けてたんですけど・・・ヤダ、ちょっと怖いこと言わないで下さいよお・・・はい・・・はい。(切る)

女、改めて部屋を見回すと壁際に立って人待ちといった感じ。

声

先ほど、「恐怖」と口にしましたが考えてみると「恐怖」という言葉にはその中にほのかな期待が元々込められているのかも知れませんが・・・例えば遊園地にあるお化け屋敷なんかを思い出してみると子供の頃にはただ怖かっただけだった気がします。大人になると怖さの中に期待感が生まれて来て・・・怖いもの見たさと言いますか・・・だとするとやはり私を支配していたモノは「恐怖」だったのではないかと思ひ直しています。

それがいつから芽生え出したのかはハッキリしていません。

あの男と出会った時からです。

あの男と目があつた瞬間、背中に冷たいモノを感じたのです。

女、時間を確認すると部屋を出て行く。

声

あの男と出会ったのは会社の研修旅行・・・工場を見て回って製品管理業務と販売業務の連携ルートについて講義を受けまして、場所は茨城県の日立でした。

会社の中で中途採用の新人は私だけで他は入社二年目とかの人達ばかりで、勉強をすと言うよりも夜の飲み会が楽しみという感じで私は少々ガツカリしたのです。そんな人達なので講義中にコンコンと話したりアクビを噛み殺したりあからさまに居眠りしている人もいましたが、あの男は所長でありながら注意を促したりする

こともせずに窓から外をボーッと見つめているだけでしたので、私はこんなヤル気のない会社で生きていけるのかと不安になりました。

また私だけ浮いてしまうのではないだろうか、同僚から毛嫌いされるのではないだろうか、敬遠され続けたら今度はどう対処したらいいのだろうか、周りとか合わせなければいけない・・・そうじゃなければまた失敗する・・・不安に飲み込まれると悪魔に心臓を押し掴みにされたような気分になってしまいます。

とにかく私は頑張って講義に耳を傾けて必死にノートを取りました。

それは私が高校時代に身につけた対処法で、何か物事に集中すると幾分か気持ちも落ち着いて不安からも解放されるのです・・・が、講義が終わってしまうと現実に戻り引き戻される様に、またさっきの悪魔が心臓を揺さぶり始めたのでした。

講義が終わったのが確か・・・夕方の五時頃でしたか・・・飲み会が七時くらいと記憶しております。

会場からバスでホテルに戻りまして三々五々、自分の部屋で集合時間まで過ごす事になりました・・・私もロビーでカギを受け取って部屋に入ろうとした時でした。私の前にいた数人の社員達の中から一人だけ男性が立ち止まりました。

そして突然振り向いて私に近づいて来たのです。それがあの男でした。

トランクを持ったコート姿の男1が部屋に入って来る。

男1

・・・。

男1、部屋の様子に戸惑った様子。

声

それが私の「恐怖」との出会いでした。

男1、部屋を出て行く。

声

目が合っていたのはおそらくほんの数秒だったのだろうと思いますが、私にとってはかなり長い時間感じられました。

その時はまさか半年後にあの男と結婚することになるとは夢にも思っていませんでしたが・・・一体何がどうなって・・・どういう経緯で一緒に暮らす事になったのか・・・今となっては全く思い出せません。

もしかしたら「恐怖」に「運命」を悟ったのかも知れません・・・天敵と遭遇した獲物が感じる「恐怖」に射抜かれた「運命」・・・。

男1、戻って来る。

その一方で・・・あの男と別れた後、知り合いから紹介された男性は「恐怖」とは無縁の優しいだけを取り柄の人・・・交際が始まる時その男性はこう呟きました。

男 1 おいおい・・・ウソだろ・・・。

声 それが今のウチの人です。

男 1 ……。

声 ですから、あの男とウチの人は正反対の表と裏・・・。

女が部屋に戻って来る。

女 あ、どうも。

男 1 え？

女 驚かれましたでしょ。

男 1 ……。

女 これ。(と、ツル)

男 1 ああ・・・ええ、まあ。

女 でも大丈夫ですから、年内中には綺麗サッパリ処分致しますので。

男 1 はあ。

女 今、どちらからいらっしやいました？

男 1 どちらからって・・・。

女 このマンション、ちよっと駅から分かりづらいかも知れませんが。

男 1 いや、別に。

女 そうですか？・・・で、どちらから？

男 1 仙台です。

女 は？

男 1 今、仙台から帰ってきたところでした。

女 そうでしたか、ご旅行で？

男 1 仕事です。

女 それはご苦労様です・・・で、どちらから？

男 1 え？

女 いや、その・・・駅前のY字路を右と左、どちらからいらっしやったのかなど。

男 1 何です？

女 どちらからでも辿り着くんですけど、右からよりも左からの方が近いんです。

男 1 知ってます。

女 あ、ご存知で。

男 1 ちよっとコンビニに用事があったて今日は右の道から。

女 なるほど、それで入れ違いに・・・お約束のお時間少々過ぎてましたからそこまで

様子を見に伺ったんですが・・・そうでしたか、コンビニに。

男 1 あの・・・アナタ、誰です。

女 オカダ様でございますよね。
男1 ええ、オカダですけど。
女 どうも私、担当させて頂きますミズサワと申します。
男1 担当？

女、男1に名刺。

男1 ・・・不動産会社。

女 本日、横山が来られなくなってしまいました。私が代わりに・・・オカダ様には事前
にお知らせしなければとは思っていましたがバタバタしております。

男1 ちよつと待って下さい、話がサッパリ見えないんですけど。

女 そうでございますよね・・・実は昨日、急性盲腸炎で入院してしまいました。

男1 は？

女 いえ、横山が。

男1 ・・・。

女 事務処理の最中に急に苦しみ出しまして病院に運びましたところすぐに手術・・・
とは行きませんで、ご存知の通りあの体格ですからね。

男1 あの・・・。

女 太ってるってことですよ、脂肪が邪魔して開腹手術が難しいから薬で散らそうって
ことになりました・・・そうなるまで治るまで時間が掛かるんです。

男1 あの、一体何の話です？

女 ですから横山です。

男1 知りません。

女 え？

男1 その方を知らないんです。

女 ・・・。

男1 そもそもおたくの会社とコンタクトを取ったこともありませんし。

女 え、オカダ様ですよね？

男1 ええ、そうです。

女 どちらのオカダさまです？

男1 どちらのって・・・この部屋に住んでるオカダですよ。

女 は？

男1 ・・・これはどういうことなんです？

女 どういうこと・・・と言いますと。

男1 ここは私のウチなんです。

女 ・・・グリーンパレス303号室ですよ。

男1 そうです。

女 いつまで住んでたんです？

男1 いつまでって・・・今もです。

女 今も？

妻と娘の三人で。

女 いやいやいや、こちらのお部屋はとっくに空き部屋となっておりますが。
男 1 空き部屋？

女 だいたい電気もガスも止まっていますし・・・それにこのツル。

男 1 これは・・・。

女 朝顔です。

男 1 朝顔。

女 横山がそう言っております・・・失礼ですけど下のお名前は？

男 1 え？

女 オカダ・・・何様でいらつしやいますか？

男 1 コウイチです。

女 オカダコウイチ様・・・(書類)あれ？・・・もお、だからフルネームで記入する

男 1 ようにして・・・申し訳ございません、オカダ様としか控えておりませんで。

女 どのオカダでも構いませんよ、違うんですから。

男 1 違う？

女 これは何かの間違いなんです。

男 1 またやらかしましたか？横山が。

女 え？

女 前に一度部屋の様子を確認しに来た時もこんな状態だったらしくて・・・その時は
男 1 花が咲いてたって言って言っていましたから・・・葉っぱにアブラムシがビッシリ、部屋の
女 掃除が大変だったって上司に報告したんですよ・・・全部引っこ抜いて綺麗に処理
男 1 したって・・・なのにこの有り様・・・まあ、身内を悪く言うのはアレなんです
女 1 仕事に対して詰めが甘いんです、彼は。
男 1 それはいつの話です？

女 確かお盆を過ぎた頃でしたかねえ。

男 1 は？ならその時にはもう空き部屋だったってことですか。

女 (書類) ええ、6月にはもう・・・そうみたいです。

男 1 みたいって。

女 実は私、別の地域を担当しておりますでここら一带の物件は全て横山が。

男 1 ならその人と話をさせて下さい。

女 それが無理なんです。

男 1 無理？

女 今朝も見舞いがてら引き継ぎに行っただけですけど、猛烈にお腹が痛む様子で唸って
男 1 ばかり・・・まともに会話が出来ない状態で。
女 ・・・。

女 とにかくこちらの物件は現在ウチの会社がお預かりしてるんです。

男 1 6月ってことは・・・じゃあ私が仙台に行った後すぐ空き部屋に？

女 アナタがいつどこに行こうと知りませんけど。

男 1 単身赴任で半年前に・・・その間、妻とも普通に電話で・・・。

女 家の電話ですか？

男1 いや・・・。
女1 携帯電話ですね。

男1 ・・・。
女1 じゃあ奥様がどこで電話を取ったのか判りませんよねえ。
男1 ・・・。

女1 そちらこそ何かの間違いなんじゃありません？
男1 間違えるはずないでしょう、自分のウチを。

女1 いくら横山でも住んでる部屋を空き部屋として登録するなんて、そんなはへましませんよ。

男1 ・・・。

女1 出てって下さい。

男1 え？

女1 もうじきオカダ様が部屋を見にいらっしゃるんです。

男1 オカダは私です。

女1 アナタじゃないオカダ様ですよ。

男1 ・・・。

女1 横山のメモによれば今日の午後二時にお会いすることになってるんですから・・・
まあ、お約束の時間は少々過ぎちゃってますけど。

男1、携帯電話。

女1 どこに掛けてるんです？

男1 妻にです。

女1 ・・・。

男1 ・・・。(切る)

女1 繋がらないんですね。

男1 ときどき調子が悪いんです、この携帯。

男1、掛け直す。

声 ウチの人は、ドアノブの生産メーカーに勤めております。

声 仕事の内容はよく知りませんが、工場の中で現場監督の様な事をしてるみたいで朝早く出掛けて帰宅は夜の十時を過ぎることも多いのです。

男1 ・・・どうなってんだ。(切る)

声 ウチでは少し遠慮気味にただ穏やかに微笑んでるだけの優しい人・・・。

女1 こんなこと聞くのはアレなんですけど・・・。

男1 何です。

女 本当は奥さんなんかいないんじゃないんですか？
男 1 え？

女 冬になるといるんです、空き部屋に棲みつこうとするホームレス。
男 1 冗談じゃない。

女 先月にも似たケースがありましたねえ、そこは一軒家でしたけど勝手に入り込んで
男 1 棲みついていたんです。

女 私はホームレスじゃありません。

男 1 その男も同じことを言っていましたよ、もちろん家宅侵入罪・・・アナタも警察沙汰
女 にはしたくないでしょ、面倒ですよ。

男 1 ちよつとその書類見せて下さい。

女 ダメですよ。

男 1 どうして。

女 個人情報ですから他人に見せるワケには行きません。

男 1 その横山って人に確認して貰えませんか？彼が作成したんですよね、その書類。
女 だから無理なんですって、彼はお腹が痛いんです。

男 1 お腹くらいどうにかありませんかね。

女 よくもまあそんな・・・彼は今、七転八倒の苦しみと闘っているんですよ。

男 1 とにかくその書類が間違ってるんですよ。

女 そのホームレスもそう叫びながら連行されて行きました。

男 1 ・・・

女 どうします？このまま居座るつもりなら本当に警察呼びますけど。

男 1 居座るも何も・・・

女 判りました、ならそのトランク見せて下さい。

男 1 トランク？

女 生活用具が一式入ってるんじゃないんですか？その辺で拾ったガラクタとか。

男 1 そんなモノ入ってませんよ、私は会社にだってちゃんと勤めてるんですから。

女 何を言ってるんです、私は仕事の有る無しを聞いてるんじゃないんです。家の有る無しを
男 1 聞いてるんですよ。

女 家があります。

男 1 どこに。

女 だからここですよ、ここ。

男 1 (笑う)

女 ・・・何です。

男 1 やれやれ・・・困りましたねえ、もういい加減にしたらどうですか？

女 困ってるのはこっちですよ。

男 1 ならいいですか？これが最後のチャンスですからね。

女 チャンス？

男 1 大家さんの名前は？

女 え・・・大家？

男 1 そうです、大家さんの名前を言ってみて下さい。

男1 ・・・。
女1 ご存知ないハズはありませんよねえ。
男1 えっと・・・。

女1 お家賃を振り込まれる先の口座名ですよ。
男1 そういうことは妻に任せてましたから。

女1 それじゃあ答えになりませんか。
男1 あ・・・待てよ・・・石・・・石川。
女1 ・・・。

男1 だったかな・・・確かアタマに「石」がついたと思うんだけど。
女1 ・・・。

男1 あ、石橋だ・・・違いますか。
女1 違います。

男1 石塚。
女1 当てずっぽうに言ってるだけじゃありませんか。
男1 でも「石」はつきますよね。

女1 つきませんよ。
男1 え？・・・「石」じゃない？

女1 (書類) この字をどうやったら「いし」と読むのか私には理解出来ませんけど。

男1 ・・・おかしいなあ。
女1 はい、もう時間切れです。

男1 あ、待って・・・頭の一文字だけ教えて下さい、そうすれば出て来そうなんです。
女1 ・・・「前」です。

男1 「前」？・・・え？「前」？
女1 そんな驚くことじゃないでしょう。

男1 いや、ちよつと意外だったもので・・・前・・・前川・・・
女1 前川でいいですね。

男1 ちよつと待って下さい。
女1 ・・・。

男1 前田・・・かな。
女1 前田ですね。

男1 いや。
女1 「前」がつく苗字なんて前田か前川くらいしかないじゃありませんか。
男1 そんなことは無いでしょ、前原だっているし。

女1 なら前原でいいですね。
男1 ちよつと待って下さい。

女1 何ですかアナタは、結局あやふやじゃないですか。
男1 いきなり大家って言われても。

女1 水回りのことか連絡取ることありますでしょ。
男1 本当に全部・・・そういうことは妻に・・・。

女1 そもそもアナタ・・・オカダさんなんですか？

男1 え？

女 さつき顔を合わせた時、私が「オカダ様ですね」って確認した後「オカダです」とオウム返ししただけじゃありませんでしたっけ。

男1 そりゃそうですよ、だってオカダなんですから。

女 つまり私が「オカダ様ですね」と尋ねた瞬間にあなたは「オカダ様」に成り済ましてんじゃないのかって言うてるんです。

男1 身分証明は出来ませよ。

女 保険証はダメですよ、顔の確認出来ませんから。

男1 運転免許証なら文句ないでしょ。

男1、運転免許証を女に見せる。

女 ……。

男1 ……。

女 ……ええ？

男1 私ですよ。

女 いやいや…これはちよつと。

男1 ま、確かにこの頃は今よりかなり太ってて…去年、胃を悪くしたせいで十キロくらい痩せたんです。

女 こんなビフォア・アフターみたいな写真見せられても本人確認になりませんよ。そんなことはないです、TSUTAYAのカードこれで作りまししたし。

男1 パスポート見せて下さい。

女 持ってませんよ、そんなの。

男1 え、今時？

女 いちいち持ち歩かないってことですよ。

男1 旅行帰りなんですよね。

女 旅行じゃないです、単身赴任…しかも仙台ですから。

男1 とにかくこの運転免許証じゃ、ちよつと。

女 でもほら現住所はここですよ…グリーンパレス303号。

男1 アナタ、さつきから人の話を全く聞いてませんよね。

女 アナタに言われたくないです。

女 その免許証を拾ってオカダコウイチに成り済ましたあなたは、そこに書かれた住所を訪ねて来てみたら運良く空き部屋だったので、これ以上寒さに耐えられないからこのままここに住んでしまおうと企んでいるところを私に見つかってしまった。

男1 ……。

女 さつきから私はそう言ってるんです。

男1 初めて言いましたよね、そんなこと。

女 成り済ましてるのはそういうことでしょ。

男1 判りました…でも憶測でしょ？

女 可能性の問題です。

男1 可能性って・・・。
女1 だってアナタがどこの誰なのかハッキリしないんですから。
男1 そんなこと言ったらそっちだってそうでしょう。
女1 私が？

男1 そうですよ、可能性とか言い出したら誰だってそうじゃありませんか。
女1 名刺、渡しましたよね。

男1 こんなモノ幾らでも作れますよ。

女1 そこにある電話番号に掛けてみて下さい。

男1 組織ぐるみって可能性もありますからね。

女1 ・・・。

男1 アナタこそ誰なんですか。

女1 ・・・ちよつと何言ってるんです。

男1 運転免許証見せて下さい。

女1 イヤです。

男1 ・・・。

女1 何でアナタに見せなきゃならないんですか。

男1 アナタがアナタであることを証明するためです。

女1 ・・・。

男1 ね、突き詰めたら結局こうなるんですよ。

女1 ・・・じゃあいいです、判りました・・・でも絶対に笑わないと誓えますか？

男1 誓いますよ、笑える状況じゃありませんからね。

女、運転免許証を見せる。

男1 ・・・。

女1 ・・・。

男1 ・・・判りました。

女1 今、笑いましたね。

男1 笑ってませんよ。

女1 口元がピクピクしてましたよ・・・だからイヤだって言ったんです。

男1 笑ってませんって。

女1 私で間違いありませんよね。

男1 だと思いません。

女1 思いますって何ですか。

男1 本人だって言われたらそうかなって気もしますし、違う人だって言われたらそれも

女1 そうかなって・・・髪型も違うし・・・写真の印象の方が明るいです。

男1 ・・・。

女1 ・・・何か、すみません。

男1 まあ、確かにこの写真見せてすぐに納得されるのも辛いっちゃ辛いんですけど・・・

女1 鉄板ネタの一つですから・・・。

男1　　いいですよ、もう・・・。
女　　これだけは言っておきますけど、私はイジワルで言ってるんじゃないですよ。
男1　　ええ・・・それは、まあ。
女　　本物のオカダ様がいらっしやった時にワケの判らない人間が居座ってたら会社の信用に関わりますでしょ、悪い評判なんてあつという間に広がるんです。
男1　　・・・。

男1、椅子に座る。

女　　ちよつとお。
男1　　すみません・・・もう少しだけ整理させて貰えませんか。
女　　整理つて。

男1　　いや・・・確かに妻とは携帯でしか話してませんから私が勝手にまだここにいと信じ込んでいただけかも知れません・・・このところずっと繋がらなくて、最後に話したのは・・・あれ・・・最後に話したのはいつだったかな。
女　　・・・。

男1　　まあ、そんな調子だったので・・・今日、戻って来たんです。
女　　それは残念でしたね。
男1　　・・・。

女　　このままだともつと残念なことになりますよ。
男1　　え？

女　　家宅侵入罪に営業妨害も重なりますからね。

男1　　・・・。
女　　さ、判ったらこの部屋から出て行って下さい。
男1　　ハハハ・・・。

女　　？
男1　　何だこりや・・・どこに行ったんだ、あいつら。
女　　あいつらつて？
男1　　妻と娘ですよ。

男1、携帯で写真を見せる。

男1　　・・・これです。

女　　こんなの見せられたつてアナタの素性は判りませんよ。
男1　　そりやそうですけど・・・この部屋に三人で暮らしてたんです・・・三年前に知人の紹介で知り合つて結婚しましてね、私は今までまともに女性とお付き合いした事がありませんでしたから結婚するなんて思つてもいなくて・・・本当はマンション買つて迎え入れてやりたいところだったんですが貯金なんか殆どありません・・・賃貸でもいいからアイツが気に入ったところならと、ここに入居したんですよ・・・ちよつと家賃は高いですけど。

女 　　もう今は格安になってますよ。

男 1 　　え、どうして。

女 　　曰く付きなんです・・・事故物件ってことですよ。
男 1 　　は？事故物件？

女 　　だから言ってるんです、オカダ様が来る前に出てって下さいって・・・ただでさえ
男 1 　　不利な条件が揃ってるんですから。

男 1 　　事故って・・・

女 　　詳しくは申し上げられません。

男 1 　　教えて下さい。

女 　　どうしてアナタが知る必要があるんです。

男 1 　　住人だからですよ、この部屋の。

女 　　・・・

男 1 　　このテーブルと椅子は駅前の専門店ですと二人で選んだものです・・・椅子は

女 　　二脚あったんですが・・・あ、このマンションはペット禁止なんですけど二階の人が

男 1 　　コッソリ犬を飼ってましてね、ミニチュアダックスフンドを・・・で、階段に糞が

女 　　落ちてたりして問題になった事がありまして、しばらくして引越して行きました

男 1 　　・・・そう、去年の暮れ・・・ちょうど一年くらい前の話です。

女 　　・・・

男 1 　　まだありますよ・・・この駐輪場、よく自転車盗まれるんで今年のはじめに監視

女 　　カメラが取り付けられたんですけどアレは凄いですね、取り付けて数日後に犯人が

男 1 　　捕まりました。

女 　　・・・

男 1 　　一階のゴミ捨て場が金網で囲われてますでしょ？私達がここに入居して間もない

女 　　頃にダンスやマットレス、粗大ゴミが大量に放置された事件がありましたね・・・

男 1 　　犯人はこの住人なのか他所の誰かが捨てたのか、最後まで判らずじまいだったん

女 　　ですが、それであの金網が設置されることになったんです。

男 1 　　・・・

女 　　横山さんが元気になったら聞いてみて下さいよ。

男 1 　　ちよつと・・・さっきの写真もう一度いいですか？

女 　　どうぞ。

男 1 　　・・・今、三年前に結婚って言われましたよね。

女 　　ええ。

男 1 　　この娘さん、小学生じゃありません？

女 　　そうですね、私の子供じゃありませんからね・・・妻の連れ子なんです。

男 1 　　ああ・・・

女 　　苗字が変わるとイジメられるって言うんで私がオカダになりました・・・それでも

男 1 　　私の方は困ることもありませんでしたから・・・なのに・・・よくある事なんです

女 　　かねえ、旦那の留守中に家族がいなくなるなんて。

男 1 　　さあ。

女 　　真相を知っているのは物言わぬ朝顔だけ・・・ひと昔前の推理小説みたいだ。

男 1

女 ……。

男1 朝顔って冬でもこんなに元気なもんなんですかね……まるで温室だ。

女 ……オカダさん。

男1 あ、やつと認めてくれましたね。

女 いえ、そういうワケじゃ……ちよつと会社に確認します。

男1 ……お願いします。

女、部屋を出て行く。

男1 ……事故物件。

声 ジグソーパズルみたいに記憶がバラバラになってしまいそうで……あの男の話に戻りたいと思います。

あの男と結婚した後もしばらくその家電量販店には勤めておりました。

以前、出版社でコメントを書いていた事がありましたので商品のポップを作る係を任されましたが、思ったよりお客様からの評判も良かったもので楽しんで取り組めました……が、ある日、私が新商品のコメントを作っていると背後で気味の悪い笑い声でしたのです。

「ヒヒヒ」

振り返るとあの男が立っていました。

家庭では仏頂面で決して笑ったことはなく、社内でも担当部署が違うのでほとんど顔を合わすことはありませんでしたから、恐らくその時があの男の笑い声を聞いた最初だったと思います。

「ヒヒヒヒヒ」

なんて品の無い笑い方だろう……私はこれからはずつとこの笑い声と付き合っていかななくてはならないのだろうか……そう思うとまたあの「恐怖」が背筋を落下して……この時ばかりはウチの中で仏頂面であることを心底ありがたいと感じたものです。

男1、改めて部屋の中を見渡す。

あの男との生活についてお話するのは少し勇気が必要です。

なぜなら記憶のほとんどがセックスに関してのことなので……もちろん新婚旅行にも行きましたし、二人で食事に出掛けたり……ごく普通のありきたりな時間も私達にはありました……一度、プラネタリアムに行った事もありました。

私は子供の頃からプラネタリアムが大好きで、その時は食事の帰り道たまたま近くを通りがかって私がどうしても行きたくなつたんだと思います。冬の星座の話でしたから年の瀬だったかも知れません。

男1、朝顔の根元がどこか探り始める。

声

あのドームの中に入った時の一瞬耳がボーンとして目眩がする感じ、あの現実味のない空間で絵空事の夜空に包まれる感覚・・・そこに私は惹かれるのです。

あの日に聞いたのはオリオン座の話・・・勇者オリオンが地上で暴れていたところ、地上の女神ガイアは一匹の小さなサソリにオリオンを殺すように命令しました。彼はジッと岩陰に隠れて酒に酔ったオリオンが来るの待ち伏せし・・・ついにその足元に一刺し。

男1

あれ？

男1、何かを見つけた。

声

毒が回って絶命したオリオンと、女神の恩恵を受けたサソリは共に天界に昇ったのですが、オリオンはサソリを恐れて逃げまわり・・・だからオリオンは冬の星座、サソリは夏の星座になって正反対、両者は永遠に出会うことがない・・・といった神話です。

男1

・・・釘だ・・・床下収納。

声

私は二人でいることが不安で堪らなかったのでしょう、小学生相手の星の話を夢中で聞いていたのですから・・・隣にあの男がいる事を忘れてしまいたい一心で。

男1、床下収納の扉を開けようとする。

声

それなのに私達が過ごした時間の中で記憶にあるのは・・・いや、それだからこそその行為だけが深く刻まれてしまったのかも知れません。いつも半ば強要されるセックスでした。

それはベッドの上ではなく、キッチンだったりトイレだったり玄関だったり・・・ベランダに出されて外ですることも度々ありました。

男1

・・・クソ。

声

あの男はセックスの時に私の顔を見ません。

決まって立ったまま後ろから両手で私の腰を鷲掴みにして、力づくで押さえつけて突き上げるだけ、飽きると場所を変えて同じ事を繰り返すだけ、思い付いたように始まる激しい時間はいつも自分勝手に終わってしまうのです。

なので私もあの男がアノ時にどんな顔をしているのか見たことはありません。

首筋に鼻息を感じるばかりで声も聞いたことがありませんでしたが、あの笑った時の顔で後ろから私を見下ろしていたに違いありません。

それはただただ粘膜を刺激するだけのセックス・・・数分間の単純作業。

なのに・・・忘れられないのです。

黄色い帽子に赤いランドセル、小学一年生女子の服装の男2が
現れる。

男2

・・・。

声

そんなセックスは私の妊娠が判明するとパタリとなくなりました。

男1、男2に気付く。

男1

・・・ミク。

男2

・・・。

男1

今、帰りか。

男2

・・・。

男1

お母さんは。

男2

・・・。

男1

お母さん、どこ行った。

男2

わかんない。

男1

どうしてこんなことになってる？

男2

・・・。

男1

どうして家の中が空っぽになってる？

男2

わかんない。

男1

なあ、お母さんは今どこにいるんだ。

男2

わかんないってば。

男1

そうか・・・でもホツとしたよ、二人共いなくなっちゃったのかと思ったから。

男2

いなくなる？

男1

帰って来たらウチの中がこんなふうなもの、ミクだってそう思うだろ？

男2

わかんない。

男1

わかんないばかりだな。

男2

先生がわかんない時には素直に「わかんない」って言いなさいって。

男1

うん、その方がいいよ・・・お母さんそのうち帰って来るんだよな。

男2

わかんない。

男1

だって、ミクを置いてどっかに行っちゃうなんてことは無いだろ。

男2

果たしてそうでしょうか。

男1

そりゃそうだよ。

男2

でもお父さん、どっかに行っちゃったよね。

男1

お仕事だもん。

男2

ヨッチャンのお父さんはお仕事でも毎日おうちにいます。

男1

そういうお父さんもいるけど、こういうお父さんもいるんだよ。

男2 いろんなお父さんがいるんだね。
男1 でもやっぱり寂しかったよな。

男2 ……

男1 え、寂しくない？

男2 わかんない。

男1 なあ、お母さんは？

男2 わかんない。

男1 何時に帰るって言ってたの。

男2 わかんないってば。

男1 そうか・・・お父さんもサッパリわかんないよ。

男2 お金ある？

男1 え？

男2 あのね、先生が給食費払いなさいって。

男1 給食費？

男2、ランドセルから封筒を出す。

男2 ここに入れて持って来なさいって。

男1 ……あれ、二学期から全然払ってないじゃないか。

男2 タダ食いはダメですよって。

男1 お母さんは知ってるの？

男2 わかんない。

男1 三千八百円か・・・(財布) ああ、一万円札しかないな。

男2 それでいいよ。

男1 ダメだよ、払い過ぎだろ。

男2 先生がね、ミクちゃんはいつも人の倍は食べるから給食費も倍払いなさいって。

男1 そんなこと言わないだろ、先生。

男2 言うよ。

男1 言わないって。

男2 なら六千二百円貰って来るよ。

男1 え？

男2 おつり。

男1 ああ・・・エライなあ、そんな大きい数の計算出来るようになったんだなあ。

男2 一万円下さい。

男1 ダメだって、ここに「おつり出ないようにお願いします」って書いてあるし。

男2 じゃあ給食費は今後一切払わないんだね。

男1 そんなことないよ、後でピツタリ入れてあげるから。

男2 ありがとう。

男1 最近、お母さんの様子どう？

男2 ……

男2

男1

男2

男1 ちよつと変だなって思ったこと無いかな。
男2 わかんない。
男1 ウチの中、これお母さんが片付けちゃったんだろ。
男2 ・・・。
男1 そうなんだろ？
男2 わかんない。
男1 変だなって思ったこと、どんなことでもいいんだけどな。
男2 わかんないってば。
男1 そうか・・まあ、帰って来たら聞いてみるよ。
男2 お金ある？
男1 え？
男2 あのね、先生がお絵かきの道具代払いなさいって。
男1 道具代？

男2、ランドセルから封筒を出す。

男2 ここに入れて持って来なさいって。
男1 ・・・パレットと絵の具・・・これも払ってないの。
男2 だからミクだけお絵かきの道具無いの。
男1 お母さん、知ってるの？
男2 わかんない。
男1 え、四千七百円・・結構するなあ。
男2 一万円下さい。
男1 ダメだよ、払い過ぎだろ。
男2 先生がね、ミクちゃんは大きくなったら泥棒になりますよって。
男1 ええ？
男2 ミクがヨッチャンの絵の具勝手に使うから泥棒になるんだって。
男1 ああ、勝手に使っちゃ良くないな。
男2 だからヨッチャンの絵の具の分も合わせて倍払いなさいって。
男1 そんなこと言うの？先生。
男2 言うよ。
男1 それはヨッチャンにお礼って言うか・・・お詫びを持って行くのが普通だよね。
男2 なら五千三百円貰って来るよ。
男1 でもここにも「おつり出ないようお願いします」って書いてあるよ。
男2 じゃあヨッチャンの絵の具使い切っちゃっていいんだね。
男1 そんなことしちやダメだよ、後でピツタリ入れてあげるから。
男2 ありがとう。
男1 ねえ、いつからおウチこんなふうなの？
男2 ・・・。
男1 テレビもないしミクの机もないよね。

男2 わかんない。
男1 学校にはすっかり行ってるの？
男2 ……
男1 これじゃ宿題だつてちゃんと出来ないよね。
男2 わかんない。
男1 朝顔だつて伸び放題になってるし。
男2 わかんないつてば。
男1 そうか……ミクに聞いても仕方ないよな。
男2 お金ある？
男1 え、また？
男2 あのね、先生がクリスマス会やるから参加費払いなさいつて。
男1 参加費？

男2、ランドセルから封筒を出す。

男2 ここに入れて持つて来なさいつて。
男1 今時はそんなことにもお金取るのか？
男2 払わない子にはサントさん来ませんよつて。
男1 おいおい……二万七千円？
男2 一万円下さい。
男1 足りないよ……つて言うか教室でやるんだろ？
男2 キヤッスルホテル。
男1 え？
男2 鳳凰の間つてところに研ナオコが来るんだつて。
男1 それディナーショーだろ？だいたい何で小学生に研ナオコなんか見せるんだよ。
男2 わかんない。
男1 こんなに行かなくていいよ、参加したい子だけでいいんだろ？
男2 ……
男1 え、行きたいの？
男2 先生がね、ミクは来なくてもいいつて。
男1 どういうこと？
男2 どうせ行かなくていいつて言われるだろうから来なくていいつて。
男1 そんなこと先生が？
男2 言うよ。
男1 他の子は行くの？
男2 ヨッチャンは行くつて。
男1 いいよ、ミクは行かなくて。
男2 ……
男1 お父さんがもっと楽しい所に連れつてつてあげるから。
男2 えっ、本当に？

男2

・・・。

男2、グッタリして崩れ落ちる。

男1

二度と言うな・・・いいか、二度とだぞ。

男2

・・・。

男1

今はもう、俺がお前のお父さんなんだ。

男2

ヒヒヒ。

男1

？

男2

ヒヒヒヒヒ。

男1

その笑い方やめろ。

男2

今、何て言った。

男1

え。

男2

俺がお前のお父さん・・・そう聞こえたけど。

男1

言ったさ。

男2

思ってないよな。

男1

・・・。

男2

そんなこと思っでないだろ。

男1

・・・。

男2

あ、違うか・・・思えないのか。

男1

・・・。

男2

ま、どっちでも同じことさ。

男1

・・・。

男2

じゃなきや、あんな酷いことしないよ・・・毎日、毎日。

男1

酷いことって・・・。

男2

今だってここ・・・絞め殺されるかと思った。

男1

言っでいい事と悪い事があるだろ。

男2

ヒヒヒヒヒ。

男1

そんな笑い方するな、いつも言っでるだろ。

男2

アンタの口からあんなセリフが出ると思わなかったからさ。

男1

・・・。

男2

見てみる、これ。

男2、シャツをめくると上半身がアザだらけ。

男2

ここ、血管潰れちゃって・・・この辺、内臓破裂してんじゃないかな・・・触っ

男1

みな、肋骨なんかグニヤグニヤだよ。

男1

・・・。

男2

小学一年生にここまでするか？普通・・・なあ、おい。

男1

誰にやられたんだ・・・これ。

男2 よく言うよ。

男1 ……

男2 アンタに決まってんじやん。

男1 バカ言え、俺は引つ叩いた事なんて一度もない。

男2 ……

男1 一度も。

男2 ガキってのはな、「言葉」だけでこんななつちやうんだよ。

男1 ……

男2 ここまでキズだらけになつちやうの、知らなかった？知っててやってたんだろ？

男1 ……

男2 だからさ、死ねって言われりや死んじまうんだ……いなきやいいって言われたらさっさと消えちやうんだよ。

男1 お前……

男2 ん？

男1 ……誰だ。

男2 アンタの娘だよ、そうなんだろ？

男1 ……

男2 愛せないんだろ？

男1 ……

男2 なあ、どうしたって愛せないんだよな。

男1 ……

男2 二万七千円。

男1 え。

男2 研ナオコ行くんだよ。

男1 ……

男2 どうせまた近場で間に合わせちやうんだからさ。

男1 連れてってやってやる……動物園にも水族館にも……他にもあちこち。

男2 厄介なんだよなあ、アンタ。

男1 厄介？

男2 アメとムチっての？たまにメチャクチャ優しい時もあるだろ？

男1 ……

男2 やめて欲しいんだよな、勘違いしちやうからさ……「もしかして愛されてる？」

男1 とか思っっちゃう瞬間もあったりして精神的に不安定になつちやうし、もつと言うと

男2 対応に困るんだよ、どうすりゃいいの？って……あれって無意識でやってんの？

男1 無意識……

男2 そうだよ、何の自覚もなくアメちゃん与えてるのかって。

男1 いや……そうじゃない。

男2 ウッソだあー。

男1 何で。

男2 だったら覚えてるよね、この朝顔。

男1 え？
男2 ほらみる。
男1 ・・・。
男2 な？無意識なんだよお、無自覚・・・ダメダメ、だったら治らねえわ・・・ほら、歌にもあるだろ？・・・ただアナタのお 優しさがあ 怖かったあゝ。
男1 お前小学生じゃないだろ。

男2、ランドセルを背負う。

男1 おい、どこ行くんだ。
男2 ひとつ忠告。
男1 え？
男2 そこ。
男1 ・・・どこ。
男2 そこだよ、そこ・・・さっきアンタがこじ開けようとしてた床下収納の扉。
男1 ・・・。
男2 そこ、開かないよ。
男1 どうして。
男2 釘でガンガンに打ってあるから。
男1 ・・・。
男2 それに、開けない方がいい。
男1 どうして。
男2 開けりゃ判るよ。
男1 ・・・。
男2 バイバイ。
男1 どこ行く気なんだ。
男2 クリスマス会。
男1 今日じゃないだろ。
男2 ウンだよ、行かないよ・・・金払ってないし、ビュウウウン。
男1 待てっ！・・・痛っ・・・。
男2、走り去る。
男1、釘を踏んだ。
男1 くそっ！

それでも男1、男2を追って部屋を出て行く。

声

お腹が目立つようになった頃、私は退職しました。
あの男が私に触れようとしなくなっただけのもその頃です。
娘が産まれた後もあの男の仏頂面は変わる事がありませんでした・・・と言うより
ますます不機嫌になっていった様に思います。
娘が泣き始めると顔をしかめて自分の部屋に入ったっきり出て来ませんでしたし、
幼稚園の行事にも一度も参加することが無く、そのうちに私達の間には会話が一切
無くなってしまうました。

男1、戻って来る。

声

それでも私は息苦しいとは感じず、むしろ安堵の気持ちが強かったと思います。
例えばそれは・・・いつもジツとして全く干渉して来ない不愉快な生き物がウチの
隅っこに黙って棲息してる様な・・・それさえ我慢していれば何の害もない不愉快
な生き物・・・なので離婚を口にしたのはあの男の方からでした。

女が戻って来る。

女

・・・。

男1

あ・・・今、小学生の女の子を見ませんでしたか？

女

え？

男1

階段を駆け下りて行ったんですが。

女

さあ・・・。

男1

ああ、もしかしたら黄色い帽子にランドセル姿の中年男に見えるかも知れませんが、
あれは小学一年生なんです。

女

言ってる意味がよく判りませんが・・・。

男1

私とここで話してたんですけど飛び出して行っちゃって、すれ違いませんでした？

女

いえ。

男1

え、そうですか。

女

私も階段で来たんですけど人の気配はしませんでしたよ。

男1

・・・おかしいな。

女

その子って・・・。

男1

私の娘です。

女

娘さん？

男1

どうにもダメなんです・・・頭ではもちろん理解はしてるんだ、してるんですけど
どうにも・・・。

女

理解って。

男1

だから・・・私の娘なんだってことをですよ。

女

・・・。

男1

だけど・・・どうしても・・・。

女

あのお、ちよっといいですか？

男1 ああ、何か・・・すみません。

女1 いえ、私もこの部屋には仕事で来てますんで。

男1 ああ・・・で、どうでした？

女1 え、何がです？

男1 この部屋はどういう状態になってました？

女1 は？

男1 会社に確認しに行かれたんでしょ？

女1 確認って・・・何を。

男1 だから横山って人がいい加減な書類作ったおかげでこんな事に・・・いや、違うな

女1 ・・・・そもそもアイツの行動が不可解なんだ。

失礼ですけど・・・どなた様です？

男1 え？

女1 誰かと勘違いされてますよね。

男1 ・・・・。

女1 私、今日は初めてここに来たんですけど。

男1 え・・・(名刺) 不動産会社のミズサワさんでしょ？

女1 いいえ。

男1 ・・・・。

女1 私、カトウと言います。

男1 ・・・・。

女1 何か？

男1 いえ、そうですか・・・似てたもんで。

女1 その、不動産屋の方ですか。

男1 ・・・・ちよつと暗くなつて来たので・・・つい。

女1 ああ、日が落ちるの早いですしね。

男1 すみません。

女1 で・・・アナタは。

男1 オカダと言います。

女1 え？

男1 ここに住んでた・・・いや、今もここは私の部屋のハズなんですけど。

女1 なら・・・もしかして、モト子さんの？

男1 ええ、そうです・・・アイツのこと知ってるんですか？

女1 私、モツチャンとは・・・あ、彼女のことそう呼んでたんで・・・モト子さんとは

仕事で一緒だったんです。

男1 仕事？

女1 随分昔の話ですけど、小さい出版社に勤めてましてモツチャン・・・モト子さんは

入社してすぐ私のアシスタントに。

出版社・・・初めて聞きました。

女1 半年くらいでしたから。

男1 家電量販店にいたことは聞いてましたけど。

女 あ、それはウチをやめてからですね・・・そこも長続きしなかったようですけど。
男1 妊娠して退職したって。

女 え、そんなこと言っていました？
男1 違うんですか。

女 でも・・・時期的にはそうなのかなあ、モツチャン・・・モト子さんは
男1 モツチャンでいいです。

女 モツチャンは何て言うか、ちよつと変わつてるところがあつて。
男1 ・・・。

女 ああ、ごめんなさい。
男1 いえ・・・教えて下さい。

女 ちよつと被害妄想つて言うか・・・。
男1 被害妄想？

女 あ、言い過ぎました・・・多分、一生懸命なのかな？頑張り過ぎちやうから自分で
男1 期待に答えられないと周りから攻められているような、そんな気分になつちやうの
かな・・・そんなところありますよね。

女 まあ、そう言われれば・・・そうなのかな。

男1 ウチの出版社にもある日突然来なくなつちやいまして、何度も連絡したんですけど
女 そのまま辞めてしまつたんです。

男1 そんなことが・・・。

女 まあ、その後しばらくしてその出版社自体が潰れちゃいましたけどね・・・お互い
男1 仕事が決まらない時期に、たまに会つては愚痴を言い合つてはお茶したり。

女 今、アイツはどこにいるんです？

男1 あの・・・失礼ですけど、本当にモツチャンの旦那様で？

女 そうです。

男1 ・・・。

女 え、何ですか。

男1 どちらの？

女 ・・・どっちつて。

男1 いや、前の旦那様か・・・今の旦那様か。

女 どうして・・・。

男1 まあ、私としてはどちらでもいいんですけど。

女 今のです。

男1 なら・・・亡くなられたのは前の旦那なんですね。

女 え？

女 関係者からチラッと聞いただけなんで・・・どっちの旦那だろうつてずっと思つて
男1 たんです。

男1 ・・・何の話です。

女 え、何も知らないんですか？

男1 ずっと仙台にいたもので。

女 それにしても・・・。

男1 どこにいるんです、アイツは。
女 ・・・拘留所ですよ。

男1 え？

女 今、拘留所に勾留されてるんです。

男1 ・・・は？

女 旦那さんを殺害した容疑で・・・。

男1 アイツが？

女 本当にご存知ないんですね。

男1 ・・・いつ。

女 半年前です。

男1 冗談でしょ。

女 冗談でそんなこと言いませんよ。

男1 ・・・。

女 どこからも何の連絡も無いんですか。

男1 ・・・ええ。

女 夫婦だったらどんなに仲が悪くても普通は連絡ありますけどね。

男1 ウチは別に仲が悪いワケじゃありませんし。

女 そうですか・・・それならそういうことでいいんですけど。

男1 え、誰かがそんなこと言ってるんですか。

女 いえ、特に。

男1 殺人容疑って・・・。

女 さき程、娘さんと一緒だったっておっしゃいましたよね。

男1 ええ。

女 あれえ、変だなあ。

男1 ホントです・・・さっきまでここで。

女 私がモッチャンから聞いた話だと、娘さんも同じ頃に行方不明になったままだとか。

男1 え？

女 ・・・やっぱり憑いてますかねえ。

男1 何が。

女 怨念です。

女、バッグから袈裟と大きな数珠を出して首から掛けると蠟燭を

二本、お鈴、さらには怪しげな仏像をテーブルに並べる。

男1 ちよつと・・・何してるんです。

女 供養といますか、お祓いですね。

男1 お祓い？

女 申し遅れました、今はこういう事をしております。

女、男1に名刺。

男1 ……霊障対策研究社。

女 一般的に言うところの除霊儀式を行う会社です……私もいろいろ仕事を転々としましたがやっとここに落ち着きましたね。

男1 霊能者ってことですよ、そんな簡単になれるんですか？

女 なれます。

男1 ……失礼ですけど、アナタの話は何もかも信じられません。

女 無理ありませんよ、私だって未だに信じられませんもの……婚活パーティーで出会ったシルバーヘアーの男性がこの社長だったなんて。

男1 アナタの話じゃありませんよ、アイツのことです。

女 じゃあ面会に行ってみればいいでしょ……始めますから静かにお願いします。

女、蠟燭に火をつける。

男1 どうしてこの部屋を。

女 事件現場だからですよ……モツチャンに頼まれてね、一度でいいからやってくれて。

男1 半年前、アイツがこの部屋で前の旦那を殺害したって言うんですか？

女 まだ審理中ですから判りませんよ……でも、この部屋で人が亡くなったのは確かなんです。

女、呪文のような念仏を唱える。

声

小さな娘を抱えながらこの先どうしたらいいのか……こんなことになるなら意地でも会社にしがみついていたれば良かった……後悔しましたが時間は巻き戻ってはいけません。

仕方なく近所のスーパーでパートを始めました。

そこで働くオバサン連中はヒマさえあれば噂話ばかりで、入ったばかりのバツイチ女はやはり標的にされるのでした……くだらない人達がくだらない話をしているだけだから気にしないようにとカウンセリングの先生からもアドバイスを頂いたのですが、仕事のアレコレでそのくだらない人達から命令されると逆に腹立たしく思い、気持ちをコントロールするので精一杯の毎日でした。

おまけに娘がヘンな咳をするようになりまして、医者に診せたら喘息性気管支炎と言われました。

とにかく栄養を充分に取らないと治らないと言われましたので自分の食べる分を減らしてでも娘には良い食材のモノを与えたり、金銭的にも精一杯……高級車でスーパーにやって来る奥様達は私と同じくらいの年齢なのに、一体この差はどこで生まれたのだろう……どうしてこんなにも不公平なんだろう……羨んでも仕方ないことは判っているんですけどね。

チーン・・・女がお鈴を鳴らす。

声

その頃からです。

あの男が私達の身边を嗅ぎまわるように、まとわり付くようになったのです。生活圏ギリギリのところから、獲物を待つハイエナのように私達の行動をジッと見ているのです。

「ヒヒヒヒヒ」

あの男の笑い声が、笑った様な顔が、あの不愉快な生き物が私達を監視し始めたのです・・・また「恐怖」が蘇って、悪魔が心臓を揺さぶり続けました。

女

・・・以上です。

女、テーブルの上を片付ける。

男1

さっき、娘が行方不明になってるって言いましたね。

女

そうみたいです。

男1

捜索願は出てるんですか。

女

そりゃ出てるんじゃないですか？知りませんがね、突っ込んだことは何も話して

男1

くれませんし詮索するのも、ちよつと。

女

・・・どうして。

男1

は？

女

いや、どうして私は何にも知らないんだらうと思ひまして。

男1

仙台にいたからなんでしょう？

女

・・・。

男1

さっきご自分でそうおっしゃいましたよね、仙台にいたから何も知らないって。

女

面会するにはどうしたら。

男1

いつでも受け付けて貰えますよ、刑務所じゃないんで。

女

そうですか。

男1

彼女、ちよつと人相が変わりましたね。

女

・・・。

男1

穏やかな顔になってました。

女

え？

男1

何か抜け落ちたって感じで・・・それだけこっちの世界がしんどかったのかなあ。

女

・・・。

男1

世間とうまく折り合いをつけるってのは結構しんどいですよね・・・人が普通に

女

生きて、家族と共に何気ない時間を持つってのは本当は奇跡なんじゃないのかって。

男1

奇跡？

女

それが当たり前のように感じてますけどね・・・モッチャンを見てるといつもそう

男1

思っています。

男1

・・・。

女 ま、私も人のこと言えた義理じゃないですけど。
男1 今まで……。

女 え？

男1 今まで、当たり前前に思っていました……私も。

女 ……。

男1 今日、ここに帰って来るまで……私が出掛ける前と同じ風景が待っていると勝手に信じ込んでいました。

女 誰でもそうですよ……帰ります。

男1 ああ……ご苦勞様です。

女 ご請求はアナタ様でよろしいですかね。

男1 え？

女 一応、私も仕事なんです。

男1 そっか……そうですね。

女 彼女、支払いはどうするつもりなんだろうってちょっと心配してたんです。

男1 ……判りました。

女 請求書はどちらにお送りすれば。

男1 今、頂いても。

女 助かりましたあ。

女、カバンから請求書を出して記入。

女 そうそう……モツチャンからこの朝顔の話を知りましたよ。

男1 朝顔……。

女 娘さんが学校から朝顔のタネを貰って来て家族で植えたって。

男1 ……。

女 珍しく娘が喜んではやぎ回って……あんな時間が週に一回でもあれば幸せなんだろうなって……だったら私なんか一番の不幸せですよ、年がら年中怒鳴ってばかりで……はい、お願いします。

男1 ……。

男1、朝顔を見つめている。

女 あの……ここに置いておきますから、早めに振り込んで下さいね。

男1 ……。

女 それじゃあ。

女、去る。

男1 ……ああ、覚えてる。

声 そんな「恐怖」の真っ只中にいる時、知り合ったのがウチの人でした。

男 1 ・ ・ ・ タネの入った袋を ・ ・ ・ ちょうどここだ ・ ・ ・ ここで私が開けたんだ ・ ・ ・ 失敗してタネが部屋中に飛び散って ・ ・ ・ アイツが怒って娘が笑い転げて、三人でタネを拾い集めて ・ ・ ・ 思いがけない所にまで飛び散って ・ ・ ・ アイツが呆れて娘がはしゃいで、三人でタネを探して ・ ・ ・ 。

声 「恐怖」とは無縁の優しいだけが取り柄の人 ・ ・ ・ そう思っていました。

男 1 これは ・ ・ ・ あの時の朝顔 ・ ・ ・ 。

と、スーツ姿の男2が現れる。

男 1 ・ ・ ・ 。

男 2 ・ ・ ・ 。

声 あの男とウチの人は正反対の表と裏 ・ ・ ・ そう思っていました。

あの男の「恐怖」から逃れたい一心で、私は彼にしがみついたのです。

不愉快な生き物から身を守るために、知り合ったその日に彼を迎え入れたのです。

男 1 おいおい ・ ・ ・ ウソだろ。

声 戸惑うままのセックスを、私は優しさと勘違いしてしまったのかも知れません。

こんなふうに出会って間もなく、彼はウチの人になったのです。

男 1 アンタ、もしかして。

男 2 オカダです。

声 その時には彼の「狂気」には全く気付くことが出来なかったのです。

私はオリオンの暴挙から逃れようとして岩陰に潜むサソリに寄り添ってしまったのかも知れませんか。

男 2 初めまして。

男 1 ・ ・ ・ 。

男 2 じゃ、無いんですけどね ・ ・ ・ 私の方は。

声 優しいだけのサソリはいつの間にか娘にその毒針を向けていたのです。

しかし私はその事態に全く気付いておりませんでした ・ ・ ・ 娘が毒に侵されて死に際まで追い詰められていたことに。

男2 そう思いたいのはヤマヤマだろうけど。
男1 だって、生きてるじゃないか・・・俺は。
男2 じゃあそう思ってるやいいさ。

男1 おい。
男2 言っとくがアンタは殺されたんじゃないからな。

声 私が殺したんです。

男2 この時間・・・今、恐らくアイツは弁護士に事件の経緯を話してる最中だ。
男1 弁護士。

男2 私の学生時代の友人でね・・・ま、アイツには内緒ですけど。
男1 ・・・。

男2 「事件性はあるものの限りなく事故死に近いケース」・・・これが警察の検証結果です・・・それなのにアイツときたら罪責感が強いのか

声 私が殺したんです。

男2 の一点張りですね・・・これじゃ弁護の仕様がなあって嘆いてました。

男1 え？事件性はあるものの・・・

男2 限りなく事故死に近いケース。

男1 何だよ、それ・・・。

男2 揉み合っているうちに勝手に倒れて頭を打ったとか・・・例えばそんな感じかな。
男1 俺が？アイツと揉み合って？

男2 自分が死んだ時の状況ですよ、いい加減思い出して下さいよ。

男1 冗談じゃない・・・俺は今朝、仙台からここまで来たんだから。

男2 ・・・。

男1 新幹線使ってね、混んでたから指定席取っとけば良かったって思いながらだよ。
男2 ・・・。

男1 駅からここまで来る途中にコンビニで弁当を買ったんだ、右側の道を歩いてね。
男2 コンビニで買ったモノはどこにあるの。

男1 え？

男2 その弁当はどこにあるんです。

男1 ・・・えっと・・・。

男2 アンタは毎日、この部屋に現れては泣き崩れて消えて行く。

男1 ・・・消えて行く？

男2 その中にですよ。

男1 床下収納・・・。

男2 毎回、私とも初対面だ。

男1 ・・・トランクだ。

男2 ありませんよ。

男1 え？
男2 コンビニの弁当でしょ、ありません。
男1 ……
男2 だいたい近所で買った弁当なんていちいちトランクに入れなくてしょ。
男1 判らないじゃないか。

男1、トランクを開けようとする。

男2 やめた方がいい、そいつを開けるとアンタは決まって泣き崩れる。
男1 俺が？

男2 そうなるともう何も話せない、だから今日はそいつを開けるのまだにしませんか。
男1 ……

男2 アンタにはあの日の状況を話して貰わなきゃならない、このままだと本当にアイツが殺したって事になりかねませんからね。

声 私が殺したんです。

男2 夫婦ってヤツは難しいもんでね……いったんボタンを掛け違うとなかなか修正が出来ない。

男1 ……
私とアイツもそんな感じでね……ひよっとしたら始めから掛け違っていたのかも知れない……ミクが産まれてからは身体に触れることも嫌がって、まるでムカデや毛虫みたいな目で見られる様になりました……女性のあ言った生理は本当に判らない。

男1 何でそんな話を……

男2 アンタはどうだったのかなって思っ

男1 上手く行っていたさ。

男2 ミクに関しては？

男1 ……

男2 ま、ウソのお父さんだから。

男1 やめろ。

男2 アンタはミクを殺そうとした。

男1 え……

男2 無意識に、無自覚に。

男1 ……

男2 「言葉」で。

男1 ……

男2 アイツはミクを守ろうとしてアンタと衝突を繰り返していた。

男1 ……

男2 そうなんでしょ。

男1 ……あぁ。
男2 さぁ、思い出して下さい……あの日にあった本当のこと。
男1 待ってくれ。

男2 ……。
男1 俺は今、死んでるのか……生きてるのか……どっちなんだ。
男2 ……。
男1 何もかもが曖昧だ……俺はそもそもオカダコウイチなのか……。

男1、椅子にうなだれる。

男1 ……あの日……まだ夏じゃないのに蒸し暑かった……気がする。
男2 落ち着いて思い出せばいい……時間はまだありますから。
男1 ……。
男2 この部屋を借りることにしましたから、不動産屋にも連絡済みです。
男1 あぁ……その人になら会いましたよ。
男2 その人？
男1 ほら、名刺。

男1、名刺を渡す。

男1 担当者が入院したとかでその人が……もうじきまた来るんじゃないかな。
男2 やれやれ、死んだ後の方がシツカリしてる。

男1 ……。
男2 そんな感じで死ぬ前のお願ひしますよ。
男1 ……そうだよな。
男2 え？

男1 俺は名刺貰って、話もして……うん、やっぱり生きてんだよ。
男2 ……。
男1 俺が曖昧なんじゃないんだ……こっちの世界が曖昧なんだ……だいたい真冬に
朝顔なんて変じゃないか。

男2 ……。
男1 弁当だっちゃんとするさ……そうだ、思い出したぞ……やっぱりトランクだ、
こいつの中に……。
男2 やめとけて。

男1、トランクを開ける。

男1 ……あ。

トランクからは子供の骨が出てくる。

男1
・・・これ。

黄色い帽子をかぶった骸骨・・・。

男1
ミック・・・ミック・・・あああ、俺がミックを・・・ああああ。

男1、泣き崩れる。

男2
私には空っぽのトランクにしか見えませんがね。

男1
ああああ。

男1
一体、アンタに何が見えてるのか私には判りません。

男1
ああああ。

男2
ミックは生きてますよ、事件後は私が引き取って一緒に暮らしています。

男1
ああああ。

男2
もっともアイツは嫌がって認めようとしてませんけどね。

男1、黄色い帽子の骸骨を抱きかかえる。

男2
・・・ダメだな、こりや。

男1、さらに骨をかき集めて抱きかかえる。

声
「言葉」は本当に難しいですね・・・今、私の胸の内がアナタに伝わっているのかどうかは判りません。

男2
また来ます。

声
でも・・・殺してしまおうって思った瞬間、それはもう殺してしまった事になるんじゃないか・・・私はそう信じているんです。

男2、去る。

男1、骨を抱いたまま泣き続けている。

次第に闇・・・。

【完】